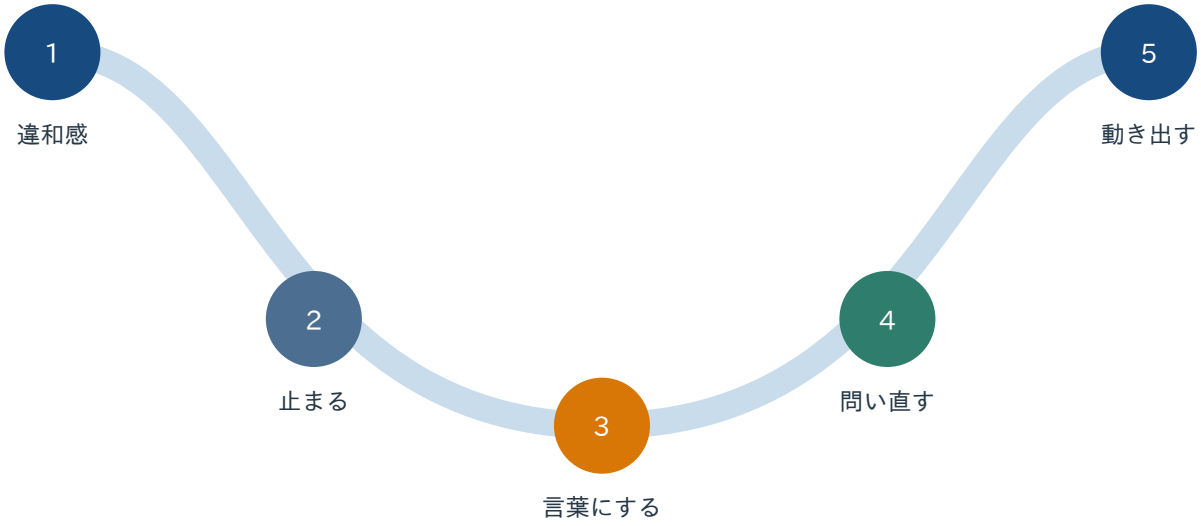
FIN FHI Research Institute　White Paper No.002

「なんとなく変だ」を、
未来を変える問いにする。

高校生からわかる前知U理論

From a Faint Discomfort to a Better Question



違和感は、答えではない。

いまの問いを、いったん見直すための信号である。

前田 英志

FIN FHI Research Institute

EXECUTIVE SUMMARY

このWhite Paperの結論

「変だ」と感じたら、すぐに答えを出さない。

まず立ち止まり、何が噛み合っていないのかを言葉にする。

それが、より良い問いと判断への入口になります。

- **1　違和感は「間違い」でも「正解」でもない**

  まだ説明できない不一致です。無視も盲信もせず、検討できる形で残します。

- **2　正しい分析でも、問いがずれていれば役に立たない**

  「どう売るか」を精密に分析する前に、「本当に売るべきものか」を点検します。

- **3　未来を当てるのではなく、今の問いを作り直す**

  前知U理論は予知の理論ではありません。問いになる前の小さな停止を扱う理論です。

- **4　AIは答える前に、本人の言葉を待てる**

  BAOSは、一度に一問ずつ対話し、違和感を「本人が引き受けられる問い」へ変えます。

WHAT IS “PRE-KNOWING”？

前知とは、未来を当てる力ではない

会議、授業、部活、進路。私たちはときどき、理由を説明できないのに、

「このまま進めるのは、何か違う」

と感じます。前知U理論が扱うのは、この「答えの前」にある小さな停止です。

前知ではないもの

× 未来を言い当てる予知

× 根拠なく直感に従うこと

× 反対するための反対意見

前知が知らせるもの

○ いまの説明と事実のずれ

○ 与えられた問いへの疑問

○ いったん止まる必要

大切な区別

違和感がある ＝ 自分が正しい、ではありません。

違和感がある ＝ いまの問いと前提を、もう一度点検する理由がある、です。

出典：前田（2026）Working Paper No.001, 2.2節・8.1節。

覚えておきたい一文

違和感は、結論ではなく「問い直しの入口」。

THE REAL PROBLEM

正しい答えより前に、正しい問いが必要

分析やAIは、与えられた問いに答えるのが得意です。

しかし、その問いが本当に合っているかまでは、自動的に保証してくれません。

例：売上が下がった店

最初の問い　「どうすれば販売員を増やせるか」

問い直した後　「お客さんは、どの場面で買うのをやめているか」

最初の問いのままでは、人員データをどれだけ分析しても、顧客が離れる本当の理由には

届かないかもしれません。分析をやり直す前に、問いを点検する必要があります。

出典：前田（2026）Working Paper No.001, 2.1節・4.4節。

問い	何を問題として扱うか
分析	データで確かめる
判断	選び、行動する

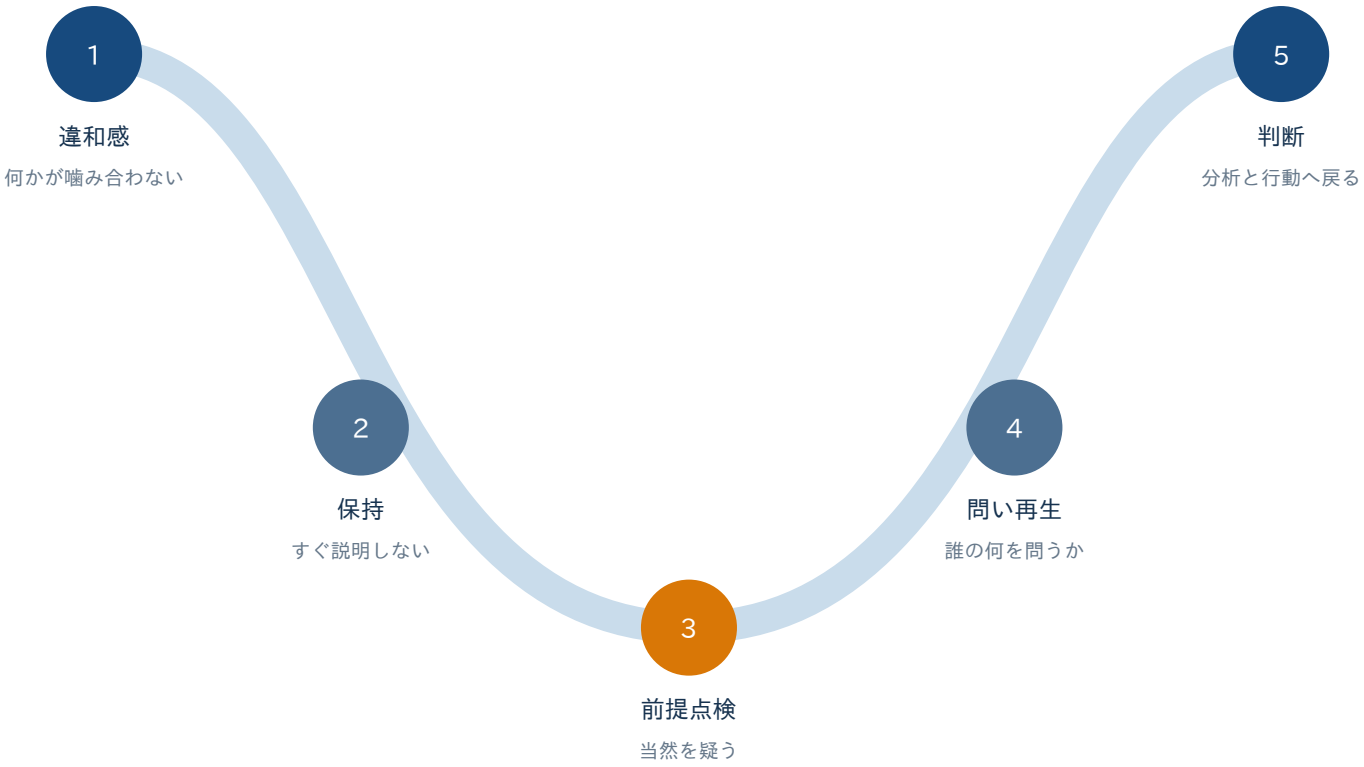
問いがずれていると、分析が精密なほど「間違った方向へ速く進む」ことがあります。

THE U-SHAPED PROCESS

違和感から、問いを作り直す5段階

U字の左側では、いまの説明をいったん緩めます。右側では、新しい問いから行動へ戻ります。

U字型の着想はScharmerのTheory Uによります。ただし、下記5段階は前知U理論の独自モデルです。



止まることが目的ではありません

再開の条件は、違和感が消えることではなく、

「何を確認するか」「誰が問いを引き受けるか」が見えたことです。

参照：Scharmer（2016）；前田（2026）Working Paper No.001, 3.1節・4節。

THREE EVERYDAY EXAMPLES

学校・部活・会社で起きる「問いのずれ」

学校

最初の問い：どうすればテストの点を上げられるか

違和感：覚えても、使える感じがしない

新しい問い：どの知識を、実際の問題に使えていないか

部活

最初の問い：どうすれば練習量を増やせるか

違和感：疲れているのに、同じミスが減らない

新しい問い：試合で判断が遅れる場面はどこか

会社

最初の問い：どうすれば会議を短くできるか

違和感：短くなっても、決定が進まない

新しい問い：誰が何を決める会議なのか

共通点は、「もっと頑張る」前に、何を解こうとしているのかを見直していることです。

A PRACTICAL DIALOGUE

違和感を問いに変える、6つの対話

1

1 停止点

どの言葉・数字・人物・場面で、判断が止まりましたか？

2

2 原形保存

理由を考える前に、浮かんだ言葉や場面をそのまま残します。

3

3 不一致探索

事実と説明、目的と手段、他人の問いと自分の問いを比べます。

4

4 仮の言葉

AIが複数案を示し、本人が「近い・違う」を修正します。

5

5 問いの候補

原因、問題の持ち主、当然と思っていた前提を問い直します。

6

6 本人確認

最初の引っかかりを扱えているか、まだ何が残るかを確認します。

大事なルール

一度に一問。本人の言葉を残す。「どれにも近くない」を認める。

出典：前田（2026）Working Paper No.001, 6.4節「BAOSによる前知言語化プロトコル」。

BAOS AND THE NEXT STEP

AIが答えを急がない価値

通常のAIは、問いを受け取ると、すぐに答えを返します。

BAOSはその前に、問いそのものが本人のものになっているかを確かめます。

答えを急ぐAI

入力された問いを前提にする

もっともらしい結論を早く出す

問いのずれが残ることがある

問いを育てるBAOS

違和感が生じた場所を探す

本人の言葉で仮置きする

問いを本人へ返してから分析する

注意すべきこと

・違和感は、偏見、不安、疲労、自己防衛からも生まれます。

・違和感から特定の結論へ、直接飛んではいけません。

・言葉にならないまま終わっても、失敗ではありません。

・前知U理論は概念モデルであり、今後の研究による検証が必要です。

このWhite Paperが伝えたいこと

違和感を信じるのではなく、違和感から問い直す。

その小さな習慣が、分析・AI・行動の質を変えていきます。

出典

［1］前田英志（2026）「正しい分析は、なぜ正しい問いを保証しないのか」FIN FHI Research Institute Working Paper No.001。

［2］Scharmer, C. O.（2016）Theory U: Leading from the Future as It Emerges, 2nd ed., Berrett-Koehler。

［3］Presencing Institute, “Theory U: five movements”（閲覧 2026年9月21日）。

［4］前田英志（2026）「未来が先に分かる思考の話ーー前知U理論 入門」note。